

# 亡国のイージス

2005(平成17)年7月31日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督＝阪本順治／原作＝福井晴敏／脚本＝長谷川康夫、飯田健三郎／音楽＝トレヴァー・ジョーンズ／出演＝真田広之／寺尾聰／佐藤浩市／中井貴一／谷原章介／吉田栄作／豊原功補／勝地涼／安藤政信／チェ・ミンソ／原田芳雄／岸部一徳／真木蔵人／竹村健／矢島健一／原田美枝子（日本ヘラルド映画、松竹配給／2005年日本映画／127分）

……遂に『亡国のイージス』が公開された。イージス艦いそかぜの全ミサイルの照準は東京に。さて、彼らの要求は……？ 4人の日本アカデミー賞最優秀主演男優賞受賞者の揃い踏みだが、全編を通じて大活躍するのは前任伍長の真田広之。そのため、「戦争モノ」よりも「人間モノ」に比重が……？ 「GUSOH」その他の専門用語の理解が不可欠だから、この映画を観た後、さらに勉強を深めるかどうかポイント！ 2時間余によくまとめたと思う反面、少しモノ足りなさもあるが、しかしまあ、それは仕方なし……。さて、郵政民営化法案の可否をめぐる「決戦」直前に公開された今夏最大の話題作は、今後の日本にどのような反響を……？

## 第4章

### そろそろ勉強の時間

#### 適材適所のアカデミー賞俳優たち

この映画は、今夏最大の大作にふさわしく、真田広之・寺尾聰・中井貴一・佐藤浩市という4人の日本アカデミー賞最優秀主演男優賞受賞者の揃い踏み。その豪華さはいいのだが、逆に主役が多くなると人物像が散漫になる危険があり、その悪しき典型例が『オーシャンズ11』（01年）や『オーシャンズ12』（04年）だった。しかしこの映画では、阪本順治監督がこの4人の役柄を見事に振り分け、それぞれが実にいい味を……。

#### 主役は真田広之

全編を通じて登場するこの映画の主役は真田広之。彼はイージス艦いそかぜの

先任伍長だから、若手の海曹や海士たちの面倒を見ると同時に、副長や士官の海佐たちに対しても意見具申ができる「中間管理職」の立場。したがって、この映画では彼の人間味が大きなポイントに……。

いそかぜの乗っ取り、東京へのミサイル発射の予告、しかもその「ミサイルの弾頭は通常にあらず」との宣告、戦後60年間の平和を享受してきた日本がはじめて迎えたこのような国家的危機が現実化していく中、彼の人間味がどんな役割を果たすことができるのだろうか？

## 「戦後60年」とこの映画の意義

この映画は、今年3月公開の『ローレライ』、6月公開の『戦国自衛隊1549』に続く福井晴敏原作映画の3本目。1年間に同一作家の映画が3本も公開されるのはきわめて異例だが、何とんでもこの3本目が福井晴敏作品の最大の注目作。そのテーマは、「戦後60年」であり、憲法改正を含めて戦後60年という節目を迎えたこの日本という国を今後どのようにもっていくのかを問う話題作。今年12月に公開される『男たちの大和／YAMATO』とともに今年最大の話題作となるものだ。興行成績の行方もさることながら、その問題提起に対して国民がどのように反応するのが最大の興味だが……？

## 『亡国のイージス』にみる決断と政治「決戦」……？

『亡国のイージス』は2005年7月30日（土）に公開された。この公開数日前に、小泉総理以下多くの著名人たちが東京での試写会に出席し、「スケールの大きさに驚いた」などの感想が伝えられていたが、この7月30日（土）公開はかなり前から決定されており、今年夏の最大の話題作となることが予想されたもの。

他方、小泉総理が「改革の本丸」と位置づけた郵政民営化法案は、本来は国会の会期延長をしないで可決したかったものだが、それができず、8月13日まで会期を延長してその成立を期している。しかし、衆議院での可決はわずか5票差であったうえ、現在審議されている参議院でも、明確な反対が十数名と発表されており、その成否は超ビミョーな情勢。そして、その天下分け目の「関ヶ原の戦い」は、今週8月1日～8月5日が1つのヤマ場……。

『亡国のイージス』は、戦後60年の平和な日本では考えられなかった国の存亡をかけた危機の中で、それぞれの人間の決断が問われた映画。国家安全保障会議に臨む梶本総理が「なんで俺のときに……」と呟く気持ももっともだが、梶本総理以下この映画の主要な登場人物たちは、それぞれの決断を下し、自分の、そして国の進路を決定させていく……。そんな映画が公開された直後に下される、郵政民営化法案をめぐるわが国の政治の「決断」とは……？

## 宮津とヨンファのチームワークは……？

この映画には、いそかぜの艦長は登場しない。それはなぜなら、既に殺害されたという設定にしているから。したがって、仙石（真田広之）は当初、宮津副長（寺尾聰）とFTG隊長と称する溝口3佐ことヨンファ（中井貴一）に騙されて、いそかぜから退艦することに……。このからくりを知り、DAISから秘かに派遣されていたのが如月（勝地涼）だが、当然仙石にはその正体がわかるはずがない。計画どおり（？）いそかぜの乗組員たちを退艦させた結果、艦内に残ったのは宮津副長以下の日本人グループとヨンファ以下の北朝鮮人グループだけとなった。その「目的」は一致しているはずだが、宮津とヨンファ、さらにこの2つのグループのチームワークは、うまく保てるのだろうか……？

## だらしない幹部たち……？

物語が進行していくにつれて、宮津副長の過去や、なぜ宮津がヨンファと結託（？）していそかぜを乗っ取ったのか、そして彼が何を目指そうとしているのか、という、福井晴敏作品のダイナミックさが明らかになっていく。そしてその中で、宮津の人間性も明らかになる……。

果たして彼の「決断」が正しかったのかどうか、それは小説の読者や映画の観客の判断に委ねなければならないが、信念にもとづいて行動する彼の姿は、きちんと一本筋の通った立派なもの。しかしそれと対比してだらしないのが、彼の信念を理解しそれに共鳴して「決起」したはずの幹部たち。事態が進み、内部対立が生まれ、さらに人的被害が発生していく中で「俺はもう疲れた」などとボヤいたり、ビビっていく幹部たちの姿に唾然……。 「勇将の下に弱卒無し」と言われ

るのはウソ……？ もっとも、彼らの名誉のために付け加えれば、それぞれ最後には立派な役割を……。

## よくまとめたが……？

『終戦のローレライ』は文庫本で全4巻。したがって映画『ローレライ』はそのエッセンスだけを抜きとっていたが、この『亡国のイージス』も文庫本で全2巻のものを2時間強にまとめただけに、原作を大幅にカットしたのは当然。そして、これだけ複雑でスリリングな原作を、わかりやすくかつ興味深く描いたのは、さすが、『KT』（02年）で金大中事件という現実の事件を見事な社会派ドラマに仕上げた阪本順治監督ならではの力量。

またこの映画は前述のように、真田広之が主演となっているうえ、彼の人間性が大きなウエイトを占めている。さらに如月や宮津副長、ヨンファや紅一点（？）で活躍するジョンヒ（チェ・ミンソ）らの過去は、なぜ現在の彼ら彼女らが存在しているのかという「必然性」を理解させるため、必要最小限のエピソードが回想シーンとして登場する。

その他、「DAIS（防衛庁情報局）」や「FTG（海上訓練指導隊）」の存在、そして「国家安全保障会議」の内容なども、この映画1本でそれなりに理解できるようにつくったのはさすが。しかし……？

## なぜできないシリーズもの大作

ハリウッド映画では、コミック本の映画化やリメイクものが「横行」した結果として（？）、興行収入の激減が伝えられている。しかしその反面、『ロード・オブ・ザ・リング』や『ハリー・ポッター』などのシリーズもの大作も……。ウォルト・ディズニーが映画化し、2006年3月公開予定の『ナルニア国物語 第1章ライオンと魔女』も、『ロード・オブ・ザ・リング』に続くシリーズもの大作。

日本では、『人間の条件』全6部が唯一の（？）シリーズもの大作。『戦争と人間』もそれを狙っていたのだが、製作費が続かなくなったため、やむなく第3部で完結させることに……。

本当は『ローレライ』にしてもこの『亡国のイージス』にしても、2部、3部

に分けてシリーズもの大作とすることができる素材。しかし出版業界と同じで、2分冊、3分冊にすると、営業上の危険が大きくなるため、どうしても1冊だけで勝負せざるをえないのが現状。そんな中、8月2日付産経新聞によれば、『亡国のイージス』の7月30日（土）・7月31日（日）の2日間の観客動員数は22万人、またその興行収入は約3億円と上々。いい映画をつくれれば観客は集まるという自信をもって、日本映画でももっとシリーズもの大作を狙ってもらいたいとは思っているが……。

## 勉強が不可欠

私が行ったのは公開2日目の7月31日の日曜日。観客はほぼ満席。そして年代層もやはり中年が多いものの、若者も結構混じっており、珍しくバランスのとれた構成……。しかし……？

私としては、前述のように2時間余りによくまとめたと感心していたのだが、約5分遅れて隣の席に座ってきたアベックの上映終了後の言葉にはビックリ！ その言葉は、「これ、一体ナンの話？ サッパリわからへん……」というもの。これには恐れ入りました……。

一般的なレベル（？）の人であれば、この映画を観れば大筋はわかるはずだが、それでも組織体制や軍事用語などきちんと勉強しなければわからないこともいっぱい。私が強調したいのは、この映画についても、台本付きで1冊1000円のお厚いパンフレットを購入して、是非積極的に映画を観た中で感じた疑問点を確認する勉強をしてもらいたいということだ。

7月26日から「6カ国協議」が再開され、北朝鮮の核開発問題が今ほど焦点になっている時はないということを自覚して、新聞やニュースから「現実」を学ぶとともに、このパンフレットさらには福田晴敏の原作から、「ある1つの想定」についてじっくりと勉強してもらいたいものだ。今年の夏最大のお薦め映画は、これに決まり！

2005(平成17)年8月2日記